

Eureka IX

六年制通信 No.14 令和3年7月20日(火)号

不便から学ぶ

もう15年ほど前になりますか、ある世論調査によれば、日本人の働く人々のうち約4割が「心の健康に不安を感じている」らしい。若者も多くが「将来に夢がない」と答えています。若者に元気がないと私たちも将来に不安を感じてしまいます。

地球規模で考えれば、現代の経済繁栄は人類史上の頂点を極めていると言っているでしょう。過去のどの時代と比べても圧倒的に、物質的に住みよい社会を享受していることに間違いはないのですから。「地球がもし100人の村だったら」というタイトルの本が昔流行りました。この本によると私たち日本人は確かに物に恵まれた100分の1の中にいますね。お金がないから救急車が来てくれない、などという社会ではないし、公園にある水道の水が飲めるなんて、聞いても信じない人々が世界にはたくさんいるでしょうね。飲める水で手を洗い洗濯をし風呂に入るなんて、そんな国に住んでいるのは地球上でどのくらいいるのでしょうか。

しかし、豊かな文明に住みながら、心の健康が脅かされていると感じているとはどういうことか。豊かな時代に生きて心が折れていくのなら、貧しい時代のほうがよかったということになるではないですか。仕事でストレスを感じるといっても、それはきっといつの時代でもどんな仕事でもあることだし、ということはやはり、豊かさゆえに心の耐久力が落ちたということになるのでしょうか。物質的な豊かさは私たちの心を強くしてはくれないのでしょうか。

喜劇王チャップリンの映画「独裁者」の最後の演説の中に「機械は私たちに豊かさを与えてくれたが、その機械のせいで私たちはいつも何かしら‘欲求’しているようになった」という有名な一節がある。(下線部の原文は Machinery has left us in want. ですから、また参考にしてください) さて、演説は「知識は感受性を奪う」と続くのですが、過度な文明の隆盛は感受性を涵養する社会の対極にあるのかもしれないと、チャップリンは一貫して考えています。そして、貧しさの中でもユーモアを忘れず明るく励ましあいながら生きていく庶民を描いています。彼の作った「モダン・タイムズ」はその象徴的な作品だと思います。夏休みに観てごらん下さい。

映画「ALWAYS 三丁目の夕日」に描かれた時代は貧しさから豊かさへの希望に溢れた社会でした。昭和の人間には懐かしいシーンが全編にちりばめられていますが、よく観ると、今の時代からは不便極まりないとしか思えないシーンがたくさんあります。冷蔵庫や洗濯機がなかったり、水洗トイレもなく、もちろんシャワーもなく、舗装のない道に砂煙が舞っていたり、学校に冷暖房なんてあるはずもない。しかし当時の人々

はそういう不便さに「耐えて」いたのではないと思います。いや正確に言えば、耐えているという感覚すら持たずに、ただ平気だったような気がします。世の中がそういうものだったのですから。

私たちは豊かな時代に生きながら、かつ心を強く持つ努力をしなくてははいけません。この豊かさを失えば、もはや耐えられないくらい、何でも手に入る時代に慣れきってしまっていますね。昔の人が平気だった不便さは私たちには「耐える」対象となってしまいました。そしてその不便さは自分から求めないと得られない時代ですよ。

ですから、若い君たちは生活の中で小さな我慢を積み重ね、多少の不便には平気でいられるよう自分を強くしてほしいと思う。そうしないと豊かさに心が負け、どんなに物質に恵まれても心の満たされない、そんな悲しい若者になってしまうような気がしてなりません。この夏、何か自分に少しの不便を課してみてもいいでしょうか。

夏休みのおすすめ

おすすめ本のコーナーは EurekaIV の途中から始まったんですね。自分のことなのに覚えていなかった。この夏休みのおすすめとして、あの頃私が取り上げた本を紹介しましょう。夏はたっぷり読書の時間を取ってくださいね。

・ 大崎善生 『聖の青春』 (講談社文庫)

これは絶対入っていると思っていました。若い君たちに是非とも読んでほしい一冊ですから。夭折した天才棋士の青春物語。師匠の森さんのことを少し知っていると二人の、まるで動物の親子のような関係を見守る著者の心がよくわかります。

・ 葉室 麟 『川あかり』 (双葉文庫)

『蝸ノ記』より私はこの作品が好きです。純粹すぎて何だか放っておけない人というのがいるものですが、この主人公がまさにそんな武士。読後感もいいよ。

・ 百田尚樹 『影法師』 (講談社文庫)

これ、単行本の時はラストの墓参りのシーンがなかったのです。で、文庫に入りまして、文庫本も買わそうとする魂胆かと思いましたが、買いました。私は百田さんの小説ではこれが一番好きです。きっと私が男だからだと思いますけど…。

・ 栗本 薫 『ぼくらの時代』 (講談社文庫)

この本がミステリーを読むようになったきっかけ。ただ、私は翻訳の日本語が嫌いで、ですからポーやアガサ・クリスティーなどを読んだのはずいぶん遅かったです。

・ 萩原 浩 『神様からひと言』 (光文社文庫)

食品会社に就職した主人公が「お客様相談室」という、クレーム対応の部署に配属され、悪戦苦闘するお話。これは面白い。自分ならこの部署には行きたくないけど。

・ 重松 清 『青い鳥』 (新潮文庫)

阿刀田高が重松さんのことを、子どもの世界を書かせたら当代随一だと評していましたが、私もそう思います。主人公は国語の非常勤講師。短編連作です。私たちのように学校をよく知る者が読んでも考えさせられます。

BGM は ゆず の 夏色 でした…。